

二〇一九年 年頭司牧書簡

司教 ベルナルド 勝谷 太治

年頭に当たり札幌教区の皆様にご挨拶と祝福を送ります。

昨年フランシスコ教皇の来日決定のニュースが入り、年頭から日本の教会は喜びと期待に満たされています。具体的なことはこれから決められていきますが、11月から12月ころ教皇様が来日され、広島か長崎から新たな視点で全世界に向けて平和メッセージが出される事は確かなようです。来日



にあたっては、様々なことで信徒の皆様への協力が必要となります。札幌においては直接的にそれに関わることは少ないかもしれませんが皆さんの祈りと協力をお願いいたします。

さて、昨年日本は多くの災害に見舞われ、北海道も被災地となってしまいました。札幌教区では東京のカリタスジャパンのスタッフに来てもらい、災害時緊急マニュアルを作成する為の会合を開く予定でいました。ところがその一週間前に被災するという皮肉な結果になってしまいました。新しいセンターが2月にオープンし、その利用方法の一つに災害時の一時避難所とすることが考えられていました。が、地震発生時わたしは東京にいて不在、司教館スタッフも出勤不能となりました。外国人観光客をはじめ多くの宿泊困難者が発生することが予想されメールで対応を指示しましたが、結

果、宿泊施設がありながらセンターに助けを求めてきた外国人の受け入れを断るといふ痛恨の対応になってしまいました。災害発生時の対応マニュアルができていなかった為、初動に失敗してしまったわけです。東日本大震災の時、多くの人が寺や神社に一時避難したが、教会には誰も来なかったという教訓から、災害時に備えて教会はどのように地域社会と関わるかが課題として問われていました。今回、一部小教区では、避難者の宿泊受け入れや、水や電気の供給にあたったところもあります。今改めて全ての小教区にこのことが問われています。普段の地域社会とのかかわり、災害時の初動体制等を考えてくださるようお願いいたします。

次に、私にとって特筆すべき昨年の出来事は、シノドス（世界代表司教会議）への参加でした。それは「青年」をテーマにした会議でしたが、その報告は「札幌教区ニュース」に載せているのでそちらをご覧ください。青少年司牧については別途考えていきたいと思えます。ここでお話ししたいことは「信仰の伝達」という視点からシノドスで扱われた「青年」についての議論です。多くの司教たちが、小教区がもはや青年に信仰を伝える場ではなくなっていることを認めていました。

そして、この状態を改善する為には、今の青年にはなく、家庭にいる子供の時からの信仰教育が重要であることが指摘されました。多くの地域の司教たちは、堅信式が彼らにとって教会からの卒業を意味していると語っていました。日本においては教会学校の卒業式がそれに当たるのではないのでしょうか。(多くの青少年が堅信を受ける前に教会を離れています。結婚を申し込んで来る信者の多くが堅信を受けていないという事実がそれを物語っています。)そして、家庭に於ける信仰伝達がしつかりとなされていないならば、子供たちは教会を離れるのです。

札幌教区では、「家庭の祈りの手引き」を作成したいと昨年の年頭書簡で書きました。典礼委員会に検討を依頼したところ、新しい祈りを作るのではなくすでにある祈り書を利用した祈りの実践を呼びかけました。それについては近日中にパンフレットを配布する予定です。大切なことは、家庭での祈りを通して、日常生活の中で常に家族とともにおられる神の現存を実感する体験です。わずかな時間であっても一日のどこかで、家族揃って祈る習慣は、家族の絆を深め、ともに祈られる神への揺るぎない信頼を培っています。

きます。

もう一点、青年への信仰の伝達で指摘された重要なポイントは、ミッシェンスクールでの信仰教育です。小教区には青年がいなくても、学校にはたくさんいるのです。現代、多くの青少年にとって信仰と出会う唯一の場は、ミッシェンスクールであると言え、外国のカトリック校は生徒や教職員のほとんどがカトリック信者である前提に立った議論でしたので、日本の現状とは違います。しかし、ほとんどが信者ではないが故に、そこに福音を述べ伝えるのはなおのこと大切なことです。そして、その機会を苦勞する事なく得られるのです。多くの教師や生徒はカトリックの理念を受け入れることを承諾して学校にきています。これも昨年の年頭書簡で書きましたが、いよいよ4月から旭川と北見の高校が藤学園より経営移管を受け共学の教区立高校としてスタートします。宗教科の信者の先生や、司祭修道者のチャプレンがいらないことが地方の学校の悩みですが、すぐそばに小教区があり、うまく学校と小教区活動を連携させれば、双方の活性化につながるのでないかと期待しています。小教区の皆さんの理解と協力、さらに積極的

な働きかけをお願いします。

次に、昨年各小教区を司牧訪問してまわりました。これも毎年指摘していることですが、更に実感させられたことは、外国籍信徒の急激な増加です。特に、地方の教会ほどその比率は高く、特にベトナム人技能実習生の増加が顕著です。私が訪問したほとんどの教会にベトナム人技能実習生がいました。昨年のクリスマスには根室教会を訪問しましたが、ベトナム人の実習生で聖堂は入り口付近まで溢れるほどになりました。これら外国籍の信徒は私たちにとってお客様ではありません。日本の教会は日本人の教会を意味するのではないといつも言っています。外国籍の信者も日本の教会のメンバーです。根室をはじめ多くの教会ですでに実践しているように、ミサを日本語と外国語の混合にしたり、教会での役割を分担したり、相互の交流を深める取り組みが必要です。そして、仕事や日常生活における相談を気軽に受けることのできるような信頼関係を築くことも共同体として必要なことです。その為には待っているのではなく、こちらから積極的に関わっていく姿勢が求められます。教会によっては日本籍と外国籍の信者の数が逆転しているところもあります。ひよつとすると私たちは発想を変えなければ

ばならないのかもしれませんが。彼らをどう受け入れるのかではなく、すでに地域で生活している多くの外国籍の人達と共にどのような新しい教会をつくっていくのかが問われているのではないのでしょうか。

司牧訪問をして感じた別な点は、当たり前ですが札幌教区の今後の宣教司牧体制について皆さんが不安に感じていると言うことです。司祭の減少と高齢化は更に加速度的に進行し、信徒も高齢化し続けています。教会の維持管理も大きな負担になってきています。(※1) そのような現状の中で、具体的なビジョンがあるかと尋ねられます。そこには自分たちの教会は今後どうなってしまうのかという不安がみてとれます。しかし、これは答えのない問いです。信徒の皆さんと模索し克服していかなければならぬ課題です。このような質問を受けるとき、期待されている答えは具体的な方法、つまりどのような目に見える組織や教会の配置を改編し、未来に備えるのかということ。しかし、変えれば全てが解決するということ。魔法の方策はありません。特に「信徒中心の教会」のイメージは具体的にどのようなものかと問われますが、組織論的にはすでにその体制はできあがっているとも言えます。しかし、

器よりもそこにいる人間のメンタリティーが肝心です。

改めて考えていたただきたいことですが、教会を形作るのは共同体です。共同体は信徒の「組織」と同義ではありません。いのちの通った共同体は小共同体の集合体として成り立ちます。確かに、教会組織を運営する為には、それを構成する係や委員会等が必要でしょう。しかし、そこは会議の場であって信仰を培う場ではありません。信仰を培うのは小共同体です。そして、その第一のものは言うまでもなく家庭です。また、身近な家族に信者がいない人にとつては、教会以外に信仰を生きる場はないのです。私は司教になってから小教区に小共同体をつくることの必要性を訴え続けてきました。しかし、ほとんど進んでいないばかりか、その試みも行われていないのが現状です。最初から無理だというあきらめ感さえ伝わってきます。外国のBCC(キリスト教基礎共同体)やSCC(キリスト教小共同体)は運動として広がっていききました。それは、小共同体を教会の基礎単位として教会組織に位置づけるもので、言わば組織論が先にあつたわけ。このまま同じ方法論を当てはめると、小共同体は教会の仕組みとして位置づけられ規約として明文化されるこ

とになります。そして信者はそれに従って配置されることになります。そうなると自由は失われ小共同体は所属を義務づけられたものになり、さらにそこで行われる祈りや分かち合いが自分に合わない時、それは苦痛になります。あるいは人と関わるよりも個人の匿名性や自分独自の信仰のあり方を守りたいと言う人も都市部には多くいます。強制される集まりは長続きしません。

信仰の本質は「愛」であり、愛の本質は他者の為に自分を越えて出向いて行き、交わりに生きることです。自分が、あるいは自分の隣にいる誰かが、互いにかけてがえのない大切な存在として、この交わりの中に無条件に受け入れられていると感じるとき、人は大きな安らぎと明日への生きる力を見いだします。それが小共同体です。ですから、規約を先に作ってそれに従って小共同体を教会組織に位置づけるのではなく、自発的にできあがる小さな集まりの集合体として教会を考えるのが良いのではないのでしょうか。小共同体というと、分かち合いや聖書研究グループ、決まった祈り等を必ず行わなければならないと考えるかもしれませんが、もっと広くとらえて、いろいろな趣旨の集まりがあつて良いと思います。たとえば、年齢世代

に關係なく、一人（独居）世帯の人達が集まって定期的に一緒に用意した昼食や、夕食をとる会。映画を見て感想を述べあうグループ。趣味を同じにする集まり。子育て世代の世帯が協力し合う小共同体。どのような目的や様式であつても、教会共同体の中の数名の小さな集まりに居場所を得て、信仰を確認できる場をたくさんつくり、その集合体が小教区教会といえるようにできないでしょうか。以前、教会はサロンではないと書きました。確かに自分の趣味や興味のみを目的に据えた閉鎖的な集まりは教会に相応しくないサロンですが、興味や趣味で集まるサロンのような場が、同じ信仰に生きる喜びを感じ、分かち合える場となるならば、それは教会に相応しいものと言えるでしょう。難しく考えて何もしないよりは、肩の力を抜いてできることを選択し失敗を恐れずに何でも何度でも試みるのが大切で。忘れてならないのは教会のみならず地域社会からも疎外されてしまいがちな人がひとりも排除されないような教会。それを紙に書かれた規約を通してではなく、心の目のネットワークを通して築いて行くことです。信仰に生きる喜びを感じられない共同体には神の愛の喜びを伝えることはできません。

札幌教区の今後の宣教司牧体制について前提となる共同体作りについてのイメージを先にお話ししました。が、上で触れたように具体的に信徒の皆さんと共に考え作り上げていかなければならないのが、システムとしての宣教司牧体制です。今までいろいろなお試みがなされてきました。札幌地区においては、ブロック司牧や共同宣教司牧が行われてきました。他の地区でも同様にいろいろなお試みがなされています。現実が先行するなかで、追いかけるように対応を迫られている感があります。この春から長期的な展望をもって、新しい体制へと札幌教区の宣教司牧体制を変えます。

今まで札幌教区は6地区に分けられ、宣教会や修道会に地区を委託するという形で宣教司牧が行われていました。すでにフランシスコ会以外の宣教会の地区委託契約（函館、苫小牧地区）は解除され宣教司祭は教区司祭と同じ扱いになっています。そして、この春から、フランシスコ会との地区委託契約を解除し、その時々々の小教区委託契約に変更することになりました。つまり、旭川、北見、釧路地区はフランシスコ会の地区ではなくなり、6地区全てが司教のもとに直接司牧される事になります。札幌教区司祭や宣教会司祭が旧フランシスコ会地区へ派

遣され、フランシスコ会司祭も札幌市内教会を担当することになります。これにより、共通の宣教司牧方針をもつて必要に応じた柔軟かつ効率的な司祭の異動、配置がなされるようになります。司祭一人が受け持つ小教区や役職は今よりも多くなります。司祭が一つの小教区に腰を据えて居住し、小教区の信徒一人一人の必要に細やかに応えるという司牧のあり方は遠い昔のものになつてしまいました。よき時代でしたがそこに戻ることはできません。その為には新しい体制への信徒の皆さんの理解と協力が必要です。この体制も、完全なものではなく、必要に応じて常に改革していく必要があります。ですから、失敗もあるでしょうし、不満を感じることもあるでしょう。しかし、それらはむしろ明日に向けてより良いものを生み出す為のヒントになるものです。失敗を恐れずチャレンジしていく中に、神の導きと助けがあるに違いないことを確信しともに進んでいきましょう。

※1 教区特別積立金の相互利用については、教区宣教司牧評議会を通してその具体的な推進を図るよう答申がありましたので、近いうちにその仕組みを考えるチームをつくる予定です。